

巻頭言

イノベーション人材・ グローバル人材の養成



東京工業大学 大学院教授
グローバルリーダー教育院 教育院長

佐藤 勲

NEW GLASSの巻頭言を執筆させていただく機会を頂戴いたしましたことを感謝申し上げます。私は、機械工学、特に伝熱工学を専門に大学で教育研究に当たっております。ガラスに関係するところでは、古くはブラウン管パネルガラスのプレス成型における製品精度の伝熱学的検討や、溶解炉内のガラス素地の振る舞いの検討などを行ってきました。今回は、こうした研究面での話から離れて、現在、多くの時間を割いて取り組んでいる人材養成について考えるところを述べさせていただきます。

日本の大学教育・大学院教育と産業界の求めるものとの乖離が叫ばれはじめてから、ずいぶんと時間がたちました。曰く、大学・大学院修了者のコミュニケーション力や英語を中心とした外国語の能力が不足している、イノベーションを牽引する役割を担う世代の基礎的専門能力が十分でない、専門分野だけでなく社会や経済・経営の知識をも養成しないとこれからのグローバル社会で諸外国に太刀打ちできない等です。大学に籍を置く身には耳の痛いご指摘ばかりですが、ひとり大学のみの取り組みだけでは、これらの抜本的改善は容易ではありません。何故なら、大学・大学院で何を学ぶか、どうして学ぶかを決めるのは学生自身であり、学生は社会における修了生（＝自身の将来像）の振る舞いや処遇を見てそれを決めているからです（大学人の負け惜しみかもしれません）。

こうした声に応えるべく、大学・産業界と国が動き始めています。例えば、経済産業省と文部科学省は共同で「産学協働人材育成円卓会議」を立ち上げ、我国を代表する企業20社のトップと12の大学長が集結し、従来の産学連携の枠を越えて、新たな価値を創造することができる人材育成の方法や具体的なアクションについて対話を行っています。第2回の会合で決定されたアクションプランでは、グローバル化した現代社会の中で我が国の継続的發展を担うイノベーション人材・グローバル人材を産学が協働して育成していくために必要なアクションを提示し、可能なものからスピーディに実行に移すことが宣言されています。大学においても、文部科学省の「博士課程教育リーディングプログラム」等の支

援を受けて、新しい大学院教育の仕組みの構築に取り組んでいるところです。

「博士課程教育リーディングプログラム」は、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くことを目的に、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学を支援する国家プロジェクトです。平成23年度から25年度まで3年間、全国から327の工夫を凝らしたプログラムが提案され、合計62の教育課程が採択されて人材養成に当たっています。本学でも4つのプログラムが採択されており、私はそのうちの一つ、「グローバルリーダー教育院」の教育院長・プログラムコーディネーターを仰せつかっています。

グローバルリーダー教育院 (Academy for Global Leadership=AGL) は、東工大という専門分野を深掘りしがちな理工学分野に強みを有する大学において、他の専門分野に対する俯瞰力はもとより、企業経営や経済、国際文化等に関する知識やコミュニケーション・合意形成のためのスキル、合意の結果を形にするための行動力といったいわゆる「人間力」を養い、将来の国際社会を牽引できるリーダー人材を輩出することを目的に、平成23年4月に全学体制で構築された教育課程です。ここに所属する学生達は、自身の専攻分野における研究を通じた専門能力の養成と並行して、週に2～3回、「道場」と呼ばれる教室に集まり、異なる専門分野を学ぶ学生が、「道場主」(教員)のファシリテートのもと、産業界や官界の第一線で活躍されている方々の協力を得つつ、経済活動や社会問題に関する共通の課題に対して議論をしたり、解決策を模索して社会に発信するなどの取り組みを行っています。また、年に1～2回は、海外の大学や企業を訪ねて、現地の学生や研究者らと国際関係やグローバルビジネスに関するワークショップを通して討論をし、一つのことをまとめ上げるリーダーとしての経験と、そのチームの中でのフォロワーとしての経験の双方を積み重ねています。平成25年度からは、道場で切磋琢磨する学生の専門分野の幅を広げるため、一橋大学と連携し、同大学の大学院生とともに人間力養成に取り組み始めたところです。AGLの仕組みと活動状況については、ホームページ (<http://www.agl.titech.ac.jp>) をご参照いただければ幸いです。

こうした取り組みを通して学生達の成長の様子を見てみると、若い人たちの柔軟性はたいしたものだと多くの場面で感じます。機械工学を専門とする私から見ると極めて難しい物性物理の分野を専攻する学生が、その分野のトップジャーナルに論文を投稿しつつ、道場で他の学生と新しいビジネスモデルなどについて嬉々として話をしていたり、海外での取り組みで「現地の経営学を専攻する学生に討論でかなわなかったので次回は打ち負かしたい」等の感想を述べていたりするのを目の当たりにすると、彼らがこれからの社会を変えていってくれるのではないかと期待がわき起こってきます。ただ、これと同時に、彼らが将来のキャリアパスの中で、AGLにおいて身につけた能力を活かして、本当に活躍していけるかには一抹の不安もあります。というのも、大学・大学院で彼らに授けられる

のは、俯瞰力やコミュニケーション力、合意形成力といったスキルと自己認識（self awareness）までで、実社会で本当に使えるリーダー能力は社会での経験に基づいて身につけていくものだからです。

本学の AGL に限らず、全国の大学院でこうした博士課程学生の能力向上の取り組みが行われています。こうした取り組みを通して、専門分野だけでなく人間力の観点からも優れた素養を身につけた博士人材が多数輩出されるようになるでしょう。こうした人材の持つ能力を活かすために、ニューガラスフォーラム会員企業の皆様をはじめとして社会の皆様にお願ひがあります。是非、彼らにチャンスをとくさん与えてください。

AGL が一橋大学と連携を開始する際に、一橋大学の山内学長から、「文理は融合するべきものではなく、共鳴すべき」との言葉を頂戴しました。ご趣旨は、「文理それぞれの特色を混ぜ合わせて『灰色』にしてしまつては双方の強みを活かさない、それぞれの強みを相補的に活用できる連携の形態が望ましい」ということだと理解しています。これと同様、大学と産業界双方がそれぞれの強みを活かしつつ協働して次世代の人材養成に当たる「産学共鳴」の姿こそが理想です。大学は学生の専門能力と人間力の素養の向上に努める、社会はこうした優れた素養を持つ修了生にチャンスを与えてリーダー能力を磨いていく。これこそが、それぞれの役割を全うしつつ実現できる真の産学協働による人材育成の姿だろうと考えます。さらには、こうして活躍する修了生（＝自身の将来像）を学生達が目にするこゝで、次のリーダー候補者を目指す若者のモチベーションが増し教育効果を高める「好循環」が構築できれば、教育プログラムの運営に携わる者として冥利に尽きます。大学院教育の変革と、これからの博士課程修了者にご期待ください。